

「象と白鳳」

写真学科 吉野弘章 Hiroaki Yoshino

タイトルの「象と白鳳」は、今年見逃してしまった展覧会のチラシに描かれていたものだ。

その二匹の動物が描かれていた、同じ絵師による二点の作品は、現在ではそれぞれ二つの異なる美術館が所蔵している。

展覧会は、その時その場限りに作品が集うもので、一度見逃してしまえば、もう二度と見ることはできない。

別々の運命をたどって受け継がれてきた二点の作品は、長い時を経て同じ展覧会で会い、会期が終われば、また別々の運命をたどることになる。

展覧会とは、その作品たちの一期一会の共演を垣間見る儂い夢のような気がする。私が長く展覧会に係わる仕事に携わってきたのは、そのような作品同士の刹那刹那の共鳴に臨場したいからに他ならない。

2016 年前半は身の回りに大きな変化があった。両親がわずか半年の間に相次いで他界し、仕事の上で兄のように慕っていた人物と、父のように尊敬していた人物も時期を同じくして他界した。過ぎゆく日々の暮らしの中では、別れと出会いがあり、ささやかな幸福と絶え間ない苦悩がある。そして人生は巡る。

写真は時間を止めることができると人は言う。写真に写された時間は常に過去であるはずだが、そこには永遠の時間が流れているかのようにも思える。そして写真は、見ることによって現実と併走する別の生きている時間を生み出すことができる。

写真を展示すること、それは別々に進行する写真の時間をまとめて、見るものに委ねられた固有の時間を紡ぎ出すことなのかもしれない。

2016 年の展覧会で出会った象と白鳳は、またいつかどこかで、きっと再会するだろう。



写真学科教授

1965 年 東京生まれ。東京工芸大学大学院芸術学研究科修了。

1980 年代より写真展の企画、作家のマネージメント、オリジナル・プリントのディーリングなどに携わる。2003 年に日本写真協会新人賞、日本写真芸術学会賞を受賞。

専門はアート・ディーリング、マーケット史、写真編集、エキシビション・デザインについてなど。

